

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

——『野ざらし紀行画巻』本の位置付けについて——

濱 森太郎

一、 承 前

貞享元年（一六八四年）八月十七日（推定）、松尾芭蕉は、江戸から伊賀上野に向かって東海道を旅立った。彼四十一歳の秋である。途中、伊勢に十日ばかり滞在して、伊賀上野に到着したのは、九月八日。この時の旅の経験をもとにして書かれたのが、彼の最初の紀行文『野ざらし紀行』である。この紀行文は、「唯、汝が性のつたなきを泣け」という作中の捨子に対することばをもって、つとに有名である。

諸本の代表的なものは、天理本（自筆）・野ざらし紀行画巻（自筆）・濁子清書画巻（中川濁子筆）・孤屋本（森川許六筆）・泊船本（版本）の五本で、この五本は、天理本（第一稿）・泊船本（第二稿）・孤屋本（第三稿）・野ざらし紀行画巻（第四稿）・濁子清書画巻（第五稿）の順に成立したと見るのが、これまでの通説である。これを一般に通用する学説にまで高めたのは、ひとえに弥吉菅一氏の業績であり、中でも「野晒紀行の再稿・定稿の問題」（『俳句研究』昭和26年3月号）と題する論文が名高い。これと相前後して、芭蕉の俳句・俳文の文献学的研究は飛躍的に前進するのだが、しかし、その期間も、弥吉氏の学説はほとんど批判らしい批判を受ける事がなかった。ましてや、昭和四

十四年に完結した『校本芭蕉全集』（角川書店刊）を座右に備えて芭蕉研究を始めた私たち戦後世代には、編者たちの文献操作の過程を再確認する事自体が、著しい徒労のように思われた。そこで私たちは、芭蕉を目の前にすると一様に「回れ右」をして、あらぬ方に資料を求めた。

それから、さらに十年が過ぎた。その間、むしろ芭蕉の研究は着実に進んだが、弥吉氏の見解は安泰だった。そして、今日では、『野ざらし紀行』の諸本に関する弥吉氏の見解に「疑問の余地はないが」などと前置するのが私たちの習いとなった。

だが、事實は、いつの場合もそれほど単純明快ではない。弥吉氏の見解にも、充分に「疑問の余地」があったのである。まず、その「疑問の余地」から書き始めてみよう。

二、 動 機

ある日、『野ざらし紀行画巻』（別名『甲子吟行画巻』、和田御雲氏蔵）の写真版をぼんやりとめくっていた私は、ふと面白い事に気付いた。目を止めたのは小さなミセケチの文字である。最初は何かの錯覚ではないかと疑ってみたが、どうやら錯覚ではないらしい。私は、急

いでその他のミセケチを追いかけてみた。その結果、さらに五つのミセケチを見つけることができた。合計六箇所。この六箇所のミセケチが、これから解いてゆくすべての問題の発端である。まず、その六箇所のミセケチを掲げてみよう。

[1]

「竹の内条」

○葛下の郡竹の内と云処

にハ

彼のちりか旧里なれは

[2]

「吉野山の条」

○独よしのおくにたとり

て

けるに

[3]

「熱田神宮の条」

○爰に石をす

ゑ

て其神と名のる

[4]

「大津の条」

○大津に出る道山路をこ

へえ

て

[5]

「尾張の条」

○伊豆の国蛭か小島の

僧

桑門

[6]

「尾張の条」

○これも去年の秋より行脚し

て

けるに

次に、この六箇所のミセケチを、これまでの通説に従って、
① 初稿本（天理本）

- ② 二稿本（泊船本）
③ 三稿本（孤屋本）
④ 定稿本（野ざらし紀行画卷）
⑤ 清書本（濁子清書画卷）
の順に対校してみると、次のようになる。

[1]

「竹の内条」

① 葛城の下郡竹の内と云処にいたる此処は彼ちりか旧里なれは

② 葛下の郡竹の内と云所にいたる此処はれいのちりか旧里なれは

③ 葛下の郡竹の内と云所にいたる此処は例のちりか旧里なれは

④ 葛下の郡竹の内と云処に彼ちりか旧里なれは

⑤ 葛下の郡竹の内と云処は彼ちりか旧里なれは

[2]

「吉野の条」

○独吉野、ヨクニタトリテ誠ニ山深ク（『蕉翁全伝』）

① 独よし野のおくにたとりけるにまことに山ふかく

② 独よし野のおくにたとりけるにまことに山深く

③ 独よし野、奥にたとりけるにまことに山ふかく

④ 独よし野、おくにたとりけるにまことに山ふかく

⑤ 独よし野、おくにたとりけるにまことに山ふかく

[3]

「熱田神宮の条」

① かしこに石をすゑて其神となる

- ② 爰に石をすえて其神と名のる
 ③ 爰に石をすへて其神と名乗
 ④ 爰に石をす^えゑて其神と名のる
 ⑤ 爰に石をすえて其神と名のる

〔4〕 「天津の条」

- ① 天津にいつる道やまちを越て
 ② 天津に出る道山路を越て
 ③ 天津に出る道山路を越て
 ④ 天津に出る道山路をこへて^え
 ⑤ 天津に出る道山路をこえて

〔5〕 「尾張の条」

- ① 伊豆の国蛭か小島の桑門
 ② 伊豆の国蛭か小島の桑門
 ③ 伊豆の国蛭か小島の桑門
 ④ 伊豆の国蛭か小島の僧桑門^え
 ⑤ 伊豆の国蛭か小島の桑門

〔6〕 「尾張の条」

- ① 是も去年の秋より行脚して我跡をしたひ

- ② これも去年の秋より行脚しけるに我名をきって
 ③ これも去年の秋より行脚しけるに我名を聞て
 ④ これも去年の秋より行脚しけるに我か名を聞て
 ⑤ これも去年の秋より行脚しけるに我か名を聞て

いずれの場合も、重要なのは「孤屋本」(③)と「野ざらし紀行画卷」(④)との関係である。通説に従うなら、定稿本である「野ざらし紀行画卷」は、当然、第三稿の「孤屋本」本文をより洗練した結果生まれたものと考えるべきだろう。だが、今ここに掲げた六箇所のミセケチは、どの場合を取ってみても、とてもそうだとはいえない例ばかりである。

たとえば、[1]のミセケチの原因は、初稿本(①)の表現を切り縮めようとして元の文章に引かれたせいであって、孤屋本(③)からの推敲過程で生まれた誤りとは考えがたい。また、[3]のミセケチの場合も、やはり初稿本(①)の表現を一度はそのまま踏襲し、後に改めたものである。さらにまた、[6]のミセケチの原因も、初稿本(①)の表現を改訂しようとして元の文章に引かれたためである。その他[2・4・5]のミセケチの場合も、やはりその表現が孤屋本(③)からの推敲過程で生まれたものだとはいえない点で共通している。

とすれば、従来、定稿本だと考えられてきた「野ざらし紀行画卷」は、あるいは初稿本(または、それに近似した本文)を下敷きにして書かれた文章ではなかったか。この予感が、これから始まる私のやや長い試行錯誤の最初の動機であった。むろんその時の私は、自分が自問自答の末に、このような文章を書くなどとは思っても寄らなかった。

三、仮説

ところで、先のミセケチに続いて、もう一つ、私の注意を引いたものがある。それは、『野ざらし紀行画巻』の中の次の六箇所の誤字・誤脱である。

[1] 「富士川の条」
○汝か性のつたなき(を)なけ。

[2] 「伊勢参宮の条」
○(髪なきものは)浮屠の属にたくへて

[3] 「伊賀上野の条」
○はらからの髪白く眉(皺)離奇て

[4] 「当麻寺の条」
○かれ非常(情)といへとも仏縁にひかれて

[5] 「熱田神宮の条」
○(熱)熱田に詣。

[6] 「甲斐の山家の条」
○甲斐の(国)山中に立よりて

※(一)内は筆者の補筆である。
この六箇所の誤字・誤脱も、これまでの通説に従って対校してみると、次のような面白い結果になる。

[1] 「富士川の条」

- ① 汝か性のつたなきをなけ
- ② 汝か性のつたなきをなけ
- ③ 汝か性のつたなきをなけ
- ④ 汝か性のつたなき(を)なけ
- ⑤ 汝か性のつたなき(を)なけ

[2] 「伊勢参宮の条」

- ① もとよりなきものはふとのそくにたくへて
- ② 髪なきものは浮屠の属にたくへて
- ③ 髪なきものは浮屠の属にたくへて
- ④ (髪なきものは)浮屠の属にたくへて
- ⑤ 髪なきものは浮屠の属にたくへて

[3] 「伊賀上野の条」

- ① 髪しろく眉しはよりて
- ② 髪白く眉皺奇て
- ③ 髪白く眉皺奇て
- ④ 髪白く眉離奇て
- ⑤ 髪白く眉皺奇て

[4] 「当麻寺の条」

- ① 彼非情といへ共仏縁にひかれて
- ② かれ非情といへとも仏縁にひかれて
- ③ かれ非情といへとも仏縁に引れて
- ④ かれ非常といへとも仏縁にひかれて

⑤ かれ非常といへとも仏縁にひかれて

[5] 「熱田神宮の条」

① あつたに詣つ

② 熱田に詣つ

③ 熱田に詣

④ 熱田に詣

⑤ 熱田に詣

[6] 「甲斐の山家の条」

① かひの国山家に立よる

② 甲斐の国山家に立よる

③ 甲斐の国山家に立よる

④ 甲斐の(国) 山中に立よる

⑤ 甲斐の国山中に立よる

※ () 内は筆者の補筆である。

これまでの通説に従えば、決定稿であるはずの『野ざらし紀行画巻』には、先の六箇所のみセケチの他に、さらに六箇所の誤字・誤脱があった事になるが、『野ざらし紀行』は、せいぜい二千二百字から二千五百字、つまり四百字詰原稿用紙にして六枚程度の小品である。その小品を、最低の場合でもすでに三回は清書したはずの芭蕉が、四回目の清書に当たってさらに十二箇所も書き誤る事が、いったいあるだろうか。

さらにもう一つ不思議な事は、芭蕉がすでに第二稿(泊船本)の段階で、この六箇所の誤字・誤脱を一度もまちがわずに正確に書いている事である。いったい芭蕉は、先に正確に書いた文章を、後に六箇所

も書き誤るような異常な男だったのだろうか。

そうではあるまい。先に推測したように、『野ざらし紀行』の諸本の系統序列の考え方そのものがおかしいのだ。もし、『野ざらし紀行画巻』が第二稿であるなら、このような不都合は、決して起らないのである。

四、 弥吉菅一氏の見解

『俳句研究』、昭和二十六年三月号に掲載された弥吉菅一氏の「野晒紀行の再稿・定稿の問題」と題する論文が、最初どのように迎えられたのか、私は知らない。けれども、この論文を皮切りに以後続々と発表された弥吉氏の論文は、まずその緻密な思考の持続において、次に、その論文の分量において、当時の読者たちを圧倒してしまったのではないかと、私は密かに空想している。最近の芭蕉研究を展望する類の文章を見ても、諸本成立の問題がほとんど片付いていない紀行文研究の中で、なぜか『野ざらし紀行』だけは、弥吉氏の主張する系統序列がそのまま承認されているからである。

しかしながら、弥吉氏の諸本研究、中でもその集大成である『野晒紀行 諸本の系統序列の研究』(羽田書房、昭和二十九年六月刊)を、今改めて読み返してみる時、私はやはり少々微妙なものを感得する。ありていに言えば、弥吉氏の行った諸本の比較校合からは、氏の主張する結論が生まれるとは思えないのである。

弥吉氏はまず、『野ざらし紀行』の諸本を比較校合して、「天理本」を初稿本と定め、次いで、「泊船本」・「孤屋本」・「野ざらし紀行画巻」の三本を比較して、「孤屋本」が「泊船本」と「野ざらし紀行画巻」との中間に位置する本文だと分析する。これを確認するために、私は、弥吉氏が行った校合作業をふたたび自分の手で繰り返してみた。

結果は、その通りであった。^{注1}

だが、そこからさらに進んで、初稿本（天理本）・二稿本（泊船本）・三稿本（孤屋本）・定稿本（野ざらし紀行画卷）と一系の系統序列を定める下りで、なぜか私の結論は弥吉氏のそれと喰違った。私の分析によれば、『野ざらし紀行』諸本の系統序列は、初稿本（天理本）・二稿本（野ざらし紀行画卷）・三稿本（孤屋本）・四稿本（泊船本）の順に並んだのである。^{補注1}

とまどった私は、とりあえず、三稿本と言われる「孤屋本」と定稿本と言われる「野ざらし紀行画卷」とを対校して、異同箇所を抽出し、その異同箇所を「天理本」及び「泊船本」と照合した。そうすれば、「孤屋本」と「野ざらし紀行画卷」とのどちらが初稿本（天理本）に近いかが判然とするからである。この二本の校合の結果抽出できた異同箇所は234箇所^{注2}。その内訳を、それぞれ

- (一)、天理本の表現・表記と一致するもの
 - (二)、泊船本の表現・表記と一致するもの
 - (三)、そのどちらとも一致しないもの^{注3}
- の三つに分けて表示すると、次のようになる。

表1(1)

『野ざらし紀行画卷』の 表 現 ・ 表 記	孤屋本『野ざらし紀行』 の 表 現 ・ 表 記	異同総数 234 例
106 例 (45.3%)	70 例 (29.9%)	天理本と 一致するもの
68 例 (29.1%)	135 例 (57.7%)	泊船本と 一致するもの
106 例 (45.3%)	84 例 (35.9%)	どちらとも 一致しないもの

ここに掲げた数値は、異同箇所の数え方によって少々は動くが、それにしても、この表の「天理本と一致するもの」の項目によれば、定稿本であるはずの「野ざらし紀行画卷」の方が、第三稿である「孤屋本」よりもさらに約15%ほど初稿本（天理本）に近いのである。これは、私の予想どおりの事実だった。

そこで私は、さらに、従来二稿本と言われてきた「泊船本」と「野

ざらし紀行画卷」とを対校してみた。要領は先の場合と同様で、まず異同箇所を抽出し、次いで、その異同箇所該当する「天理本」及び「孤屋本」の表現・表記を照合した。^{注4}その結果を、やはり先と同じように分類して表示すると、次のようになる。^{注5}

表一(2)

『野ざらし紀行画卷』の 表現・表記	泊船本『野ざらし紀行』 の表現・表記	異同総数 250 例
108 例 (43.2%)	78 例 (31.2%)	天理本と 一致するもの
82 例 (32.8%)	138 例 (55.2%)	孤屋本と 一致するもの
106 例 (42.4%)	93 例 (37.2%)	どちらとも 一致しないもの

この表を見ても、やはり「野ざらし紀行画卷」が初稿本(天理本)

に近い表現・表記を留めている事は明らかだろう。「野ざらし紀行画卷」は、第三稿だと言われてきた「孤屋本」はもちろん、第二稿であるはずの「泊船本」よりもさらに12%ほど初稿本(天理本)に近いのである。

したがって、これまでの巨視的な分析から言えば、「野ざらし紀行」の第二稿は「野ざらし紀行画卷」でなければならぬ。これが、私の最初の結論だった。この結論は、先に述べたミセケチの分析結果とも誤字・誤脱の分析結果とも一致していた。

五、問題の所在

だが、この事実だけで、「野ざらし紀行」の第二稿が「野ざらし紀行画卷」だと主張するのは、まだ無理であった。ことに、中川濁子が松尾芭蕉の依頼を受けて「野ざらし紀行画卷」を清書し、決定稿を完成しているいきさつから考えても、この「野ざらし紀行画卷」が定稿の性格を持つ事は疑えない。とすれば、「野ざらし紀行画卷」は、定稿であると同時に第二稿でもあるのだろうか。このディレンマを私は是非とも解く必要があった。そのためには、「野ざらし紀行」諸本の系統を二系統以上の複線として考えれば良かったのだが、私がそれに気付くのはもっと後の事である。

取りあえず私は、「野ざらし紀行画卷」の表現・表記をもっと細部に渡って分析してみた。最初の手懸は、先に掲げた数表一(1)・(2)の中にあった。

まず、表一(1)によれば、「野ざらし紀行画卷」の中には、「天理本」とも「孤屋本」とも一致しない独自の表現・表記が106箇所(45.3%)も含まれているが、「孤屋本」の場合は、その独自の表現・表記が84箇所(35.9%)しか含まれていない。つまり、数人の転写を経て本文に私

意的な乱の加わった可能性が心配される「孤屋本」の方が、芭蕉自筆の本文よりかえって独自の表現・表記が少なく、安定しているのである。

同じ事は、「泊船本」についても言える。表1(2)によれば、「野ざらし紀行画卷」の中には、「天理本」とも「孤屋本」とも一致しない独自の表現・表記が106箇所(42.4%)も含まれている。だが、「泊船本」の場合は、その独自の表現・表記が93箇所(37.2%)で、これも少々だが減っている。つまり、この場合も、数回の転写を経た「泊船本」の方が、芭蕉自筆の本文よりかえって独自の表現・表記が少ないのである。

それは、取りも直さず「孤屋本」及び「泊船本」がかなり、忠実な書写本である事を示すとともに、「野ざらし紀行画卷」がやや荒削りの文章であることを示しているだろう。この点から見ても「野ざらし紀行画卷」は第二稿にふさわしいのだが、こうした推測を重ねるだけでは、まだ充分ではない。「野ざらし紀行画卷」の具体的な個性の中に、この画卷が、第二稿であると同時に決定稿でもある証拠を発見する事が必要なのである。

先に掲げた表1(1)によると、「野ざらし紀行画卷」と「孤屋本」とを校合して抽出した異同総数234例。その内、「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記106例。その106例の異同箇所を列記したのが、後に掲げる付表1(A)である。^{注6)}

何の変哲もない表なので、試みに、その中に二本の線を入れてみた。

それは、『野ざらし紀行』の冒頭から帰郷の条までを第一部、大和行脚から美濃大垣までを第二部、桑名から江戸帰着までを第三部に分割して、その境界を示す分割線である。そうしてみると、「野ざらし紀行画卷」の場合は、独自の表現・表記が第一部に27例、第二部に24例、

第三部に55例のかたちで分布する。「野ざらし紀行画卷」の文字数は、第一部881文字、第二部625文字、第三部750文字であるから、この分量の違いを考慮しても、やはり第三部に独自の表現・表記が集中している事は明らかである。

そこで念のために、「孤屋本」・「泊船本」についても、同様な調査を繰り返してみた(付表1(B)・付表1(C))。それを今、数表のかたちで単純に整理すると、次のようになる。

表1(3)

野ざらし紀行画卷	27	24	55	106
孤屋本	28例	26例	30例	84例
泊船本	29例	21例	43例	93例
	第一部	第二部	第三部	全体

この表を一見すれば、問題がどうやら『野ざらし紀行』の第三部に隠れているらしい事は、誰にも容易にわかるだろう。いずれの本文の場合も、独自の表現・表記が増減する原因は、この第三部の数値の増減にあるからである。それでは、『野ざらし紀行』第三部で、何が起きたのか。

六、「野ざらし紀行画卷」第三部

「野ざらし紀行画卷」第三部、すなわち伊勢桑名から江戸帰庵までの記述は、その筆蹟や、絵と文字との配合の点から見ても、明らかに乱雑な印象を受けるが、それにしてもここで何が起こったのか。これは一見難問に思えたが、そのつもりで先に掲げた付表1(A)・(B)・(C)を

見渡せば、それだけで充分だった。「野ざらし紀行画卷」の第三部に独自の表現・表記が集中する最大の原因は、どうやら次のような表記の混乱にあったらしいのである。

表一(4)

○「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記(漢字表記)

No.	天理本	野ざらし紀行画卷	孤屋本	泊船本
4	かな	哉	かな	かな
7	みな	皆	みな	みな
15	ばかり(濁点付加)	計	ばかり(濁点付加)	ばかり
16	かなしけ	衰気	衰け	衰け
26	にくまれ	悪まれ	にくまれ	にくまれ
27	か	歟	か	か
37	ねきは	根際	根きは	根きは
38	たちまち	忽	たちまち	たちまち
41	ばかり(濁点付加)	計	ばかり(濁点付加)	ばかり
55	いも	芋	いも	いも
56	あらふ	洗ふ	あらふ	あらふ
66	かな	哉	かな	かな
69	むかし	昔	むかし	むかし
91	かくすとも	かくす共	かくすとも	かくすとも
101	わすれ	忘	わすれ	わすれ
106	程	計	ばかり(濁点付加)	ばかり
113	むかし	昔	むかし	むかし

118	かならず	必	かならず	かならず
(121)	のほり	昇り	のほり	登り
127	しのふ	忍	しのふ	しのふ
130	いたる	至る	いたる	いたる
143	なか／＼に	明ほの 中／＼に	あけほの なか／＼に	あけほの なか／＼に
(152)	こからし	木枯	木からし	困
(158)	しくるゝ	時雨ゝ	しくるゝ	しくるゝ
160	あした	朝	あした	旦
(166)	かな	哉	かな	かな
167	くれ	暮	くれ	くれ
171	ぬすまれ	盗れ	ぬすまれ	ぬすまれ
184	おほろ	朧	おほろ	おほろ
193	かな	哉	かな	かな
209	くらはむ	喰はん	くらはん	くらはん
213	むつき	睦月	むつき	む月
216	たまふ	給ふ	たまふ	たまふ
224	かな	哉	かな	かな
232	ゆく	行	ゆく	ゆく
234	かな	哉	かな	かな

※頭の番号は、異同元表(付表一(イ))によったもの。付表一(A)・(B)とも共通する。
※他本に漢字表記の例があっても字体が違っている場合は参考に
なるので、頭の番号に()印をつけて掲載した。(121)・(158)・(166)。

下同じ。

表(5) ○「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記(仮名表記)

No.	天理本	野ざらし紀行画卷	孤屋本	泊船本
32	是	これ	是	是
42	不帯	おひす	不帯	不帯
82	日比	日ころ	日比	日比
100	此	この	此	此
107	て	ほと	程	程
117	是	これ	是	是
129	大和	やまと	大和	大和
138	死に	しに	死	死に
141		うち	中	中
144		しろき	白き	白き
145		こと	事	事
162	声	こゑ	声	声
175	牛	うし	牛	牛
189	越	こえ	越	越
222	恋	こひ	恋	恋

言うまでもなく、この表(4)は、「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記(付表A)の中から、「野ざらし紀行画卷」だけが漢字で表記していることを拾ったもので、総数は34例。この分量は、「野ざら

し紀行画卷」独自の表現・表記(106例)の中の約32%にあたる。また、表(5)は、それとは逆に「野ざらし紀行画卷」だけが仮名で表記していることを拾ったもので、総数は15例。この分量は、「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記の中の約14%にあたる。そして、この両者を合わせれば、これだけで、「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記の内の45%を占めるのである。

むしろこれは、「野ざらし紀行画卷」に限った事ではない。付表(B)・(C)を使って、「孤屋本」・「泊船本」の中からこのような例を拾うと、やはりこれも、45%前後の分量になるのである。今、念のためにそれを表示すると、次のようになる。

表(6)

野ざらし紀行画卷	独自の漢字表記	独自の仮名表記	独自の表現全体の割合
34例	8例	15例	49/106 (45%)
26例	35例	36/84 (43%)	
10例	43/93 (46%)		

その内訳となると少々喰い違ってくるが、全体の分量は45%前後で一定している。したがって、『野ざらし紀行』の諸本はいずれもあることは漢字表記にするか仮名表記にするかを廻って、大きく揺れ動いている文章だと見なければならぬ。つまり、芭蕉の表記意識自体が、大きく揺れているのである。問題は、その大きな揺れが、いったいどこに向かって動いているかである。

さて、ふたたび表(4)に戻って、「野ざらし紀行画卷」独自の漢字

表記の内実注目してみよう。

総数で34例。内訳は、第一部13例、第二部7例、第三部14例。特徴は、和語をかなり強引に訓漢字で表記している事である。たとえば、

「哉」(かな)・「計」(ばかり)「歟」(か)・「共」(とも)などの助詞や、「忽」(たちまち)・「必」(かならず)・「中く」(なかなか)などの副詞の例。これらはまだ良いとしても、

101 忘(れ)

127 (121) 昇り(登り)

忍(ふ)

160 時雨、(しぐるゝ)

184 盗(ま)れ

213 喰(ら)はん

※(一)内は筆者補筆。

などの動詞や

(158) 木枯(らし)

(166) 朝(旦)

などの名詞の例では、送り仮名の添え方や訓漢字の宛て方が少々粗雑である。その原因は、恐らく芭蕉の表記意識の中に漢字の使い方が比較的自在で、しかも、送り仮名を大部分省略する漢文訓読の文字感覚が残っているためであろう。

その粗雑さを克服し、もっと正確に訓める文章を作り上げるには、どうすればよいか。それはいうまでもない。芭蕉は、もっと仮名書を殖し、送り仮名を丁寧につつ必要があるのである。そして、その点から言えば、「野ざらし紀行画巻」の第二部・第三部で独自の仮名表記が殖えている事は注目に値する。今、改めて先の表1(5)を見ても、たとえば、

100 この(他本、「此」)

117 これ(他本、「是」)

の仮名による書き分けは、「此」や「是」と書いた際の訓みの混乱を予防する利点がある。また、

82 日ころ(他本、「日比」)

129 やまと(他本、「大和」)

のような訓漢字を避けた文字使いも、誰にでも正確に訓める文章を目差した慎重な配慮からではなからうか。さらにまた、144の「しろき」(他本「白き」)は、「明ほのやしら魚しろきこと一寸」の「しろ」であって、色彩としては「白」よりもむしろ光の透明な輝きを表示したものである。また、175の「うし」(他本「牛」)の場合も、「誰か智そ齒染に餅おふうしの年」の「うし」で、動物の牛と干支の「丑」年とをかけた表現である点を配慮したものである。こうしてみると、ここにもまた、正確に訓める文章を目差した慎重な配慮が見えると言ってよいだろう。先の独自の漢字表記といい、独自の仮名表記といい、一見、不統一な芭蕉の表記の背後には、このような表記態度の変化が隠れていたのである。

七、正確に訓める文章

ところで、以上の実例だけではまだ納得できない人のため、さらにもう少し実例を掲げたいと思う。次に掲げるのは、「野ざらし紀行画巻」独自の表現・表記の中から、作者の誤字・誤脱の例を拾ったものである。中には文字の省略・追加・改訂かと疑われる例も含んでいるが、それは、何をもって正しい表記とするかが少々曖昧な当時の書きことばの実情を配慮したためである。この表からも芭蕉の表記態度の強引さは、充分に窺われるのだが、問題は、その強引さがどちらを向いているかである。

表(7)

○「野ざらし紀行画卷」独自の表現・表記
(誤字・誤脱、あるいは省略・改訂とも考えられる例)

No.	天理本	野ざらし紀行画卷	孤屋本	泊船本
12	朋友に	朋友(に)	朋友に	朋友に
30	にくむ	悪(む)	悪む	悪ム
33	つたなきを	つたなき(を)	つたなきを	つたなきを
45	もとよりなき		髪なき	髪なき
46	ものは		ものは	ものは
70	しは	皺(皺)	皺	皺
72	守(り)袋	守(り)袋	守り袋	守り袋
88	詣て	詣て、	詣て	詣て
94	非情	非常(情)	非情	非情
173	たか	誰か	誰	誰カ
183	きのふ	昨日ふ	きのふ	昨日
186	我	我か	我	我
207	あふ	逢ふ	逢	あふ
210	我	我か	我	我
214	我	予	我	われ
223	卵の花	卵(の)花	卵の花	卵の花
230	かひの国	甲斐の(国)	甲斐の国	甲斐の国

※(一)内は筆者補筆。

この表を一覧すれば、先の答は言うまでもあるまい。第一部では、

12 朋友(に)

30 悪(む)

33 つたなき(を)

72 守(り)袋 ※(一)内は筆者の補筆である。

など、明らかに送り仮名の不足した例が多い。だが、第三部は、その逆で、

173 誰か

183 昨日ふ

186 我か

207 逢ふ

など、かなり丹念に送り仮名を送っている。もし、この送り仮名が無ければ、これらの文字は、それぞれの文脈によって、

173 誰 (た・たれ・だれ・たが)

183 昨日 (きのふ・さくじつ)

186 我 (わ・われ・わが)

207 逢 (あふ・あひ(連用型))

などと様々に訓めるだろう。

中には、「昨日ふ」のような神経過敏の例もあるが、それもまた、正確に訓める文章を目差す芭蕉の熱意の現われである。一見乱雑に見える芭蕉の表記態度も、やはりその内実は、正確に訓める文章を目差して変化しているのである。

こうした表記態度の初発的な様子から見ても、やはり「野ざらし紀行画卷」は、第二稿にふさわしいのではあるまいか。

八、結 論

さて、繰り返して言うが、そもそも『野ざらし紀行』は、和語を訓漢字で表記する際に生まれる不都合を廻って大きく揺れ動いている文章である。訓漢字を多くすれば、文章の意味は取りやすくなるが、読みの正確さは損われる。その上、和語独自のニュアンスも失われる。芭蕉は、『野ざらし紀行画卷』を書く過程で、どうやらこのディレンマに直面したのである。「和漢混雑文」といつてしまえば平凡だが、確かな色彩や形で識別できるわけではない。その文体もまた、結局は、どのことばをどう書き現わすべきかという不断の選択の結果であって、それ故に、その文体は否応なく作者の内面の立たずまいを反映する。和語を訓漢字で書き現わす事の利点と失点とを心得て、作者はより読みやすく、よりわかりやすい文体を体得する事が必要なのである。

だが、『野ざらし紀行画卷』執筆当時の芭蕉は、まだ、そのディレンマを訓漢字を多用した漢文書き下し調の文章で強引に切り抜けようとした。それは、恐らく、主人公の手柄を反映する事や文章の格調を高める事など、文学的な効果を計算した上での行動だったにちがいない。しかし、その文章では、たびたび読みの正確さが損われた。そこで初めて、芭蕉は強引な訓漢字の利用を控え、誤読を招きやすい訓漢字には送り仮名を添え始めた。その結果、『野ざらし紀行画卷』の表記は、特に第三部で大きく混乱し、かなりの矛盾をはらむ事になった。先に掲げた独自の漢字表記34例、仮名表記15例、そして誤字・誤脱(省略・追加・改訂の例も含む)17例。これが、その矛盾の結果である。この三つを合わせれば、これらの表記の問題が『野ざらし紀行画卷』独自の表現・表記(表ⅠA)全体の62%を占めている。

このような文章が果たして成熟した文章と言えるだろうか。答は、

否である。芭蕉は、『野ざらし紀行画卷』を書く過程で、ようやく彼自身の内側に読者を意識し、読みやすくなりやすい文章を模索し始めた。かつて漢詩調の俳句を作り、高踏派を自認して孤独を噛みしめていた芭蕉が、やっと、その境地を脱して、もっと広い視野の中で自分の読者を捜し始めたのである。これが、『野ざらし紀行画卷』の表記に対する私の判断である。

一九八〇・八・十六、稿了

注(1) 本文校合の際には、弥吉菅一氏等が編集された『改版野ざらし紀行・鹿島詣』(明玄書房)及び『芭蕉紀行総索引(上)』(明治書院)所収の本文を用いた。

注(2) 異同表を付表Ⅰ(イ)として本稿末尾に掲げる。

注(3) 分類表を付表Ⅰ(ロ)として本稿末尾に掲げる。本文中の表Ⅰ(1)は、この付表Ⅰ(ロ)をもとにして作成したものである。

注(4) 異同表を付表Ⅰ(ハ)として本稿末尾に掲げる。

注(5) 分類表を付表Ⅰ(ニ)として本稿末尾に掲げる。本文中の表Ⅰ(2)は、この付表Ⅰ(ニ)をもとにして作成したものである。

注(6) 紙面の都合で本稿末尾に掲げる。

注(7) 紙面の都合で本稿末尾に掲げる。

補注Ⅰ、『濁子清書画卷』は、『野ざらし紀行画卷』をただ清書しただけの本文なので、比較の対象から外した。

※本稿を成すにあたり、弥吉菅一先生の御助力を得た。記して深謝する。

付表一い『野ざらし紀行画卷』・孤屋本『野ざらし紀行』異同表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
頁	1	2	4	1	2	3	4	5	1	2	4	4	6	1	2	2	2	4	4	4	5	5	6	6	5
行	2	2	4	1	3	4	4	5	1	2	4	4	6	1	2	2	2	4	4	4	5	5	6	6	5
天理本	云	けむ	八月	かな	こゆる	降て	みな	みぬ	云ける	此たひ	みち	我に	哉	ちり	はかり	かなしけ	川	たえす	はかり	待	ま	けむ	こよひ	あす	ちゝ
野ざらし紀行画卷	云	けむ	八月	哉	こゆる	降て	皆	みぬ	云ける	此たひ	みち	朋友	哉	ちり	計	哀気	川	たえす	計	待	ま	けむ	こよひ	あす	ちゝ
孤屋本	いひ	けん	は月	かな	越る	ふりて	みな	見ぬ	いひける	此旅	路	朋友に	かな	チリ	はかり	哀け	河	たへす	はかり	まつ	間	けん	今宵	明日	父
泊船本	いひ	けむ	八月	かな	越る	降て	みな	見ぬ	いひける	此たひ	路	朋友に	かな	チリ	はかり	哀け	川	たえす	はかり	まつ	間	けむ	こよひ	あす	ちゝ

26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
1	1	2	2	3	3	4	5	3	4	1	2	5	6	1	2	3	4	5	6	6	9	9	9	1	2	3	3
にくまれ	かゝ	ちゝ	汝	にくむ	あらし	是	つたなきを	眼前	みちのへ	はつか	ねきは	たちまち	煙	有けるを	はかり	不帯	かけ	にて	もとゝりなき	ものは	一の	華表	ほのくらく	みえて	計	千とせ	嵐
悪まれ	敷	ちゝ	汝	悪	あらし	これ	つたなき	馬上吟	道のへ	廿日	根際	忽	けふり	有けるを	計	おひす	かけ	にて		一の	華表	ほのくらく	見えて	計	千とせ	あらし	
にくまれ	か	父	なんち	悪む	あらす	是	つたなきを	眼前	道野部	二十日	根きは	たちまち	煙	有けるに	はかり	不帯	掛	似て	髪なき	ものは	一の	鳥井	ほのくらく	見えて	はかり	千年	嵐
にくまれ	か	父	なんち	悪ム	あらじ	是	つたなきを	眼前	道のへ	二十日	根きは	たちまち	けふり	有けるを	はかり	不帯	懸	似て ^{注1}	髪なき	ものは	一の	鳥井	ほのくらく	見えて	はかり	千とせ	あらし

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
12					11										10												
5	5	5	5	3	1	8	8	7	6	4	4	3	1	1	6	5	4	4	1	8	8	7	6	6	5	5	5
彼	彼	此処	処	大和のくに	泪	汝か	汝	拝めよ	守袋	たゝ	しは	むかし	故郷	初	かな	とふ	たき物	てふ	あか	女	立寄	ある	よまむ	歌	あらふ	いも	をんな
彼	彼	処	大和の国	なみた	汝か	汝	おかめよ	守袋	只	難	昔	古郷	初	哉	とひて	たき物	てふ	あか	をんな	立寄	ある(或)	よまむ	哥	洗ふ	芋	をんな	
例の、	例の、	此処	所	大和国	泪	なんち	なんち	おかめと	守り袋	唯	皺	むかし	故郷	はしめ	かな	問て	焼物	蝶	我名	女	立より	有	よまん	歌	あらふ	いも	おんな
れいの、	れいの、	此処	所	大和国	なみた	なんち	なんち	おかめよ	守り袋	只	皺	むかし	故郷	初	かな	とひて	たきもの	蝶	あが名	おんな	立より	ある	よまん	哥	あらふ	いも	をんな

109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82
17			16			15										14			13								
2	2	1	7	1	1	9	8	8	7	6	5	5	1	2	1	1	1	7	7	6	5	4	3	7	7	7	6
有て	有て	有て	程			あそふ	おほくは	わすれ	此	声は	ひゝき	木を	おく	ひかれて	非情	へけむ	云	かくすとも	ならむ	へたる	詣て	おく	なくさむ	家有	おくに	やふより	日比
有て	有て	ほと	計	また	いはむ	かくる	おほくは	忘	この	声は	ひゝき	木を	おく	ひかれて	非常	へけむ	云	かくす共	ならむ	へたる	詣てゝ	おく	なくさむ	奥	慰む	家に	日比
あり	あり	程	はかり	又	いはん	かくれ	多くは	わすれ	此	声	ひゝき	木を	おく	ひかれて	非情	へけん	いふ	かくすとも	ならん	へたる	詣て	おく	慰む	家有	おくに	藪より	日比
有て	有て	程	はかり	また	いはむ	かくる	おほくは	わすれ	此	声	ひゝき	木を	おく	ひかれて	非情	へけん	いふ	かくすとも	ならん	へたる	詣て	おく	慰む	家有	おくに	藪より	日比

137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110
20					19					18																	
5	4	4	10	9	9	5	4	1	6	6	6	5	4	2	2	2	1	9	9	8	7	7	5	4	4	3	3
おもひて	出し	むさし野を	秋風	義朝	云	います	いたる	大和	しのふくさ	しのふ	へて	みさゝき	み残し	既	日	のほり	耳を	是	かならず	是	浮世	心み	みえて	むかし	彼	たふとし	たる
おもひて	出る	武蔵野を	秋風	よし朝	云	います	至る	やまと	しのふ草	忍	経て	御廟	み残し	既	日	昇り	耳を	是	必	これ	浮世	心み	みえて	昔	彼	たふとし	たる
おもひ	出し	武蔵野	秋風	よしとも	いひ	今頃	いたる	大和	忍ふ草	しのふ	へて	御陵	見残し	すてに	月	のほり	耳も	これ	かならず	是	うき世	心見	見へて	むかし	彼の	たふとく	る
おもひて	出し	武蔵野	秋風	よしとも	いひ	います	いたる	大和	しのふ草	しのふ	経て	御陵	見残し	既ニ	日	登り	耳を	これ	かならず	是	うき世	心見	見えて	むかし	彼	たふとし	たる

165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138
25					24					23					22					21							
2	1	1	4	4	4	3	3	2	2	1	8	7	7	6	6	6	5	2	1	3	3	1	4	4	1	7	7
みる	うらふ	此	声	よる	しくるゝ	哉	こからし	風吟ス	風吟	かな	とまり	めでたき	なか／＼に	たるそ	たる	こゝろ	なのる	大イニ	あつたに、						にて	秋	死に
みる	うらふ	此	こゑ	よる	時雨ゝ	哉	木枯	風吟ス	風吟	哉	とまり	めでたき	なか／＼に	たるそ	たる	こゝろ	名のる	大イニ	熟田に、	こと	しろき	明ほの	かた	うち	にて	秋	しに
見る	この	うらふ	声	夜	しくるゝ	かな	木からし	風吟す	風吟	かな	とまり	目出度	なか／＼に	たり	たり	心	名乗	大イに	熟田ニ、	事	白き	あけほの	方	中	にて	秋	死に
見る	うらう	この	声	夜	しくるゝ	かな	困	風吟ス	風吟	哉	とまり	目出度	なか／＼に	たるそ	たる	心	名のる	大イニ	熟田に、	事	白き	あけほの	かた	中	にて	あき	死に

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	
		31		30					29					28		27					26							
5	2	1	3	2	7	7	7	5	6	5	5	4	4	1	4	2	1	8	7	7	4	4	3	1	5	3	3	
おほろ	辛崎	湖水の	何やら	越	ふしみ	きぬ	我	伏見	ぬすまれ	きのふ	しろし				のほり	水とり	朝かすみ	出る	牛	むこ	たか	草鞋	くれ	暮	草鞋	こゑ	かな	あした
朧	辛崎	湖水の	何やら	こゑ	ふしみ	きぬ	我	伏見	盗れ	昨日ふ	白し				のほり	水とり	薄霞	出る	うし	智	誰か	草鞋	暮	暮	草鞋	こゑ	哉	朝
おほろ	からさき	湖水	なにやら	越	伏見	衣	我	伏見の	ぬすまれ	きのふ	しろし	所のよし	秋風居住の	登り	水取	朝霞	いつる	牛	婿	誰	わらち	くれ	くれ	わらち	声	かな	あした	
おほろ	辛崎	湖水	なにやら	越	ふしみ	衣	我	伏見	ぬすまれ	昨日	白し			登り	水取り	朝霞	出る	牛	婿	誰か	わらち	くれ	暮	わらち	声	かな	旦	

221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194
		35			34				33						32												
1	1	10	9	7	5	8	6	3	1	8	7	3	3	2	1	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
云遣し	方	心地	まこと	たまふ	むつき	いはく	我	くらむ	共に	おはりのくに	我	かな	いき	あふ	廿												
申遣し	許	心地	まこと	給ふ	睦月	いはく	予	喰はん	ともに	尾張の国	我	哉	生	逢ふ	二十												
申つかはし	方	こゝち	誠	たまふ	むつき	曰	我	くらはん	友に	尾張国	我	かな	いき	逢	貳拾	雀かな	花見貞なる	菜畠に	吟行	干鱈さく女	其かけに	躑躅いけて	かけて	腰を	旅店に	休らひとて	屋の
申つかはし	方	こゝち	まこと	たまふ	む月	曰	われ	くらはん	ともに	尾張の国	我	かな	活	あふ	廿	雀哉	花見貞なる	菜畠に	吟行	干鱈さく女	其陰に	つゝいけて	懸て	腰を	旅店に	休らひとて	屋の

注1、字形は、「髪」とも「髻」とも読める。
従った。

※ 本表の頁数・行数は『芭蕉紀行総索引(上)』の頁数・行数表示に従った。

234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222
36												
9	9	9	7	7	6	1	9	6	6	5	4	3
かな	なくさむ	ゆく	山家	かひの国	哉	ふたゝひ	哉	おくる	とこく	かな	卯の花	恋
哉	慰む	行	山中	甲斐の	哉	二たひ	哉	おくる	杜国	哉	卯花	こひ
かな	なくさむ	ゆく	山家	甲斐の国	かな	二度	かな	贈	杜国子	かな	卯の花	恋
かな	慰む	ゆく	山家	甲斐の国	かな	二たひ	かな	贈	杜国子	かな	卯の花	恋

表

231	225	220	210	197	191	184	172	165	159	149	136	130	119	113	99	90	82	74	66	55	45	37	29	20	12	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

付表一(は)『野ざらし紀行画卷』・泊船本『野ざらし紀行』異同表

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.																									
4				3										2							1	頁																												
2	1	1	6	6	4	4	4	3	2	1	1	1	5	5	4	3	3	2	2	1	5	5	2	2	行																									
かなしけ		はかり		ほとり		ちり		預		哉		有		我に、		尽し、		みち		云		ちりと		ちり		おもしろき		みぬ		たり		みな		こゆる		さす		却て		かな		なり		寒気		云		無何に		天理本
哀気		計		ほとり		ちり		預		哉		有		朋友		尽し		みち		云		ちりと		ちり		面白き		みぬ		たり		皆		こゆる		指		却て		哉		也		寒気		云		無何に		野ざらし紀行画卷
哀け		はかり		ほとり		預		かな		有		朋友に、		尽し		路		いひ		ちりと		ちり		面白き		見ぬ		たり		みな		越る		指		却て		かな		也		寒気		いひ		無何に		孤屋本		
哀け		はかり		辺		チリ		預ケ		かな		ある		朋友に、		つくし		路		いひ		チリ		おもしろき		見ぬ		けり		みな		越る		指ス		却而		かな		なり		さむ気		いひ		無何		泊船本		

26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
2	2	3	4	4	5	8	8	8	8	1	1	2	2	3	4	5	2	3	7	1	2	2	2	5	6	8	
有	此	うき世	はかり	待	ま	聴	すて子	秋	風	にくまれ	か	ちゝ	汝	にくむ	是	つたなきを	折ん	眼前	けり	はつか	餘り	ねきは	むち	たちまち	茶	まつはや	はかり
有	この	うき世	計	待	ま	聞	捨子	秋	風	悪まれ	敷	ちゝ	汝	悪	これ	つたなき	おらん	馬上吟	けり	廿日	餘	根際	鞭	忽	茶	松葉屋	計
有	この	うき世	はかり	まつ	間	聞	捨子	秋	風	にくまれ	か	父	なんち	悪む	是	つたなきを	おらん	眼前	けり	二十日	餘り	根きは	鞭	たちまち	茶	松葉屋	はかり
あり	此	浮世	はかり	まつ	間	きく	すて子	あき	かぜ	にくまれ	か	父	なんち	悪ム	是	つたなきを	折ん	眼前	鼻	二十日	餘り	根きは	むち	たちまち	ちや	松葉や	はかり

81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
11					10					9																	
8	6	4	3	1	6	4	4	2	8	8	8	8	6	6	6	5	4	2	9	9	7	6	6	5	5	4	3
汝	守袋	しは	むかし	故郷	かな	たき物	てふ	絹	女	云	てふ	立寄	よまむ	あらふ	いも	みる	ふもと	計	華表	一の	入事	ものは	もとりなき	にて	有	かけ	不帯
汝	守袋	雛	昔	古郷	哉	たき物	てふ	きぬ	をんな	云	てふ	立寄	よまむ	洗ふ	芋	見る	麓	計	華表	一ノ	入事			にて	有	かけ	おひす
なんち	守り袋	皺	むかし	故郷	かな	焼物	蝶	絹	女	云	てふ	立より	よまん	あらふ	いも	見る	麓	はかり	鳥井	一の	入事	ものは	髪なき	似て	有	掛	不帯
なんち	守り袋	皺	むかし	故郷	かな	たきもの	蝶	絹	おんな	いひ	てう	立より	よまん	あらふ	いも	みる	ふもと	はかり	鳥井	一の	入	ものは	髪なき	似て	あり	懸	不帯

109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82
16				15				14				13				12											
5	4	8	7	6	5	2	5	1	1	1	7	7	7	5	5	3	7	7	7	6	5	5	5	5	5	3	8
庵	我	わすれ	此	声は	伐	ふかく	まつ	非情	けむ	云	かくすとも	大イサ	ならむ	詣て	当麻寺に	なくさむ	家有	おくに	やふより	日比	彼	彼	此処	処に、いたる	処	大和のくに	まゆ
庵	我	忘	この	声は	伐	ふかく	松	非常	けむ	云	かくす共	大イサ	ならむ	詣て、	当麻寺に	なくさむ			比ころ	彼	彼		処	処	大和の国	まゆ	
庵	我	わすれ	此	声	伐	ふかく	松	非情	けん	いふ	かくすとも	大イサ	ならん	詣て	当麻寺に	慰む	家有	奥に	藪より	日比	例の、	例	此処	所に、いたる	所	大和国	まゆ
いをり	われ	わすれ	此	声	伐ル	深く	忝	非情	けん	いふ	かくすとも	大いさ	ならん	詣て	当麻寺	慰む	家有	おくに	藪より	日比	れいの、	れい	此所	所に、いたる	所	大和国	眉

137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110
20				19								18				17											
4	4	15	14	12	11	9	9	9	8	4	4	1	6	6	5	4	2	2	9	9	8	7	7	5	1	7	6
出し	武蔵野を	あき	にたり	又	所	秋風	義朝	云	有	いたる	いたる	大和	しのふ	年	みさゝき	み残し	既	のほり	是	かならず	是	浮世	心み	みえ	て	程	跡
出る	武蔵野を	秋	似たり	又	所	秋風	よし朝	云	有	至る	至る	やまと	忍	年	御廟	み残し	既	昇り	是	必	これ	浮世	心み	みえ	ほと	計	跡
出し	武蔵野	秋	似たり	又	所	秋風	よしとも	いひ	有	いたる	いたる	大和	しのふ	年	御陵	見残し	すてに	のほり	これ	かならず	是	うき世	心見	見へ	程	はかり	跡
出し	武蔵野	あき	にたり	また	処	秋風	もしとも	いひ	あり	いたるに	いたる	大和	しのふ	年を	御陵	見残し	既ニ	登り	これ	かならず	是	うき世	心見	見え	程	はかり	あと

165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138
									24				23				22			21							
5	4	4	4	4	4	3	3	3	2	2	1	8	7	7	6	1	1	3	3	1	4	4	3	7	7	7	7
雪み	声	よる	しくるゝか	しくるゝ	くさ枕	哉	竹斎に	こからし	風吟	入	やとり	とまり	めでたき	なかゝに	ころ	詣つ	あつた							暮	秋	たひ寝	死にも
雪見	こゑ	よる	時雨ゝか	時雨ゝ	草枕	哉	竹斎に	木枯	風吟	入	やとり	とまり	めでたき	なかゝに	ころ	詣	熟田	こと	しろき	明ほの	浜のかたに、	うち	枕	暮	秋	旅寝	しにも
雪見	声	夜	しくるゝか	しくるゝ	草枕	かな	竹斎に	木からし	風吟	入	やとり	とまり	目出度	なかゝに	心	詣	熟田	事	白き	あけほの	浜の方に、	中	枕	暮	秋	旅寝	死も
ゆき見	声	夜	しくるゝ	しくるゝ	草まくら	かな	竹斎ニ	風	風吟	入ル	屋とり	とまり	目出度	なかゝに	心	詣つ	熟田	事	白き	あけほの	浜のかたへ、	中	まくら	くれ	あき	旅ね	死にも

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166
31		30			29				28			27			26								25				
3	1	3	3	2	7	7	6	4	6	5	1	4	2	8	7	7	6	4	4	2	1	5	3	3	2	1	1
松	湖	何	や	越	き	我	逢	姿	ぬ	きの	の	水	朝	牛	む	た	と	草	く	す	草	こ	か	あ	み	う	此
水	水	や	ま	ぬ	ぬ				す	の	ほ	と	か	す	こ	か	し	鞋	れ	て	鞋	ゑ	な	した	る	ら	
の		ら	ち		ふ				ま	ふ	り	り	み												ふ	ふ	
松	湖	何	山	こ	き	我	逢	姿	盗	昨	の	水	薄	う	聲	誰	年	草	暮	捨	草	こ	哉	朝	み	う	此
水	水	や	路	え	ぬ	か			れ	日	ほ	と	霞	し		か		鞋			鞋	ゑ			る	ら	
の		ら								ふ	り	り													ふ	ふ	
松	湖	な	山	越	衣	我	逢	姿	ぬ	きの	登	水	朝	牛	婿	誰	年	わ	く	捨	わ	声	か	あ	見	う	こ
水	水	に	路		衣				す	の	り	取	霞					ら	れ		ら		な	した	る	ろ	の
の		や							ま	ふ								ち			ち				ふ	の	
套	湖	な	や	越	衣	我	あ	す	ぬ	昨	登	水	朝	牛	婿	誰	と	わ	く	す	わ	声	か	旦	見	う	こ
水	水	に	ま				ふ	か	す	日	り	取	霞			カ	し	ら	れ	て	ら		な	見	ら	の	
		や	路						ま									ち			ち			る	う		

221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194
33					32																						
6	4	3	10	7	7	4	3	3	3	3	2	1	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
我	くさまくら	くらはむ	きたり	したひ	我	小嶋	かな	桜	いき	ふたつの	あふ	廿															おほろ
予	草枕	喰はん	来り	聞	我か	小嶋	哉	桜	生	二ツの	逢ふ	二十															朧
我	草枕	くらはん	来り	聞	我	小嶋	かな	桜	いき	二ツの	逢	貳拾	雀かな	花見只なる	菜畠に	吟行	女	干鰯サク	其かけに	いけて	躑躅	かけて	腰を	旅店に	休らひとて	昼の	おほろ
われ	くさまくら	くらはん	来たり	きゝ	我	小嶋	かな	さくら	活	二ツ	あふ	廿	雀哉	花見只なる	菜畠に	吟行	女	干鰯さく	其陰に	いけて	つゝし	懸て	腰を	旅店に	休らひとて	昼の	おほろ

249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222
37			36											35					34								
2	1	10	9	9	8	7	7	6	6	3	3	9	9	6	6	5	4	3	2	1	10	7	6	5	4	9	8
程に	帰り	庵	かな	ゆく	立より	山家	かひの国	哉	わけ出る	下ン	吾妻	哉	形見	おくる	とこく	かな	卯の花	恋	云遣し	方へ	心地	たまふ	はしめ	むつき	円覚寺	いはく	
ほとに	帰り	庵	哉	行	立より	山中	甲斐の	哉	分出る	下らん	東	哉	形見	おくる	杜国	哉	卯花	こひ	申遣し	許へ	心地	給ふ	初	睦月	今年	円覚寺の	いはく
ほとに	帰り	庵	かな	ゆく	立より	山家	甲斐の国	かな	分出る	下らん	東	かな	形見	贈	杜国子、	かな	卯の花	恋	申つかはし	方へ	こゝち	たまふ	初	むつき	今年	円覚寺	曰
	かへり	いほり	かな	ゆく	たちより	山家	甲斐の国	かな	分ヶ出る	くたらん	あづま	かな	かたみ	贈	杜国子、	かな	卯の花	恋	申つかはし	方へ	こゝち	たまふ	はしめ	む月	ことし	円覚寺	曰

※ 本表の頁数・行数は『芭蕉紀行総索引上』の頁数・行数表示に従った。

250
3
夏衣
夏衣
夏衣
夏衣
なつ衣

108 例 (43.2%)	247 234 193 185 171 159 152 134 127 115 108 99 88 81 70 60 45 31 22 16 10 1 248 235 213 186 172 163 154 136 128 118 109 100 93 82 71 62 51 34 23 17 11 2 250 236 215 188 175 166 155 140 129 120 110 103 94 83 74 63 55 35 26 19 13 3 237 222 191 181 167 156 141 131 121 113 104 96 84 75 68 56 38 28 20 14 6 241 228 192 182 168 158 150 132 123 114 105 97 87 80 69 57 39 30 21 15 8	天理本と一致するもの
82 例 (32.8%)	249 239 220 211 176 158 144 134 123 103 71 56 43 28 19 10 1 250 240 224 213 185 160 148 135 127 104 82 60 45 32 21 12 3 244 226 215 186 162 149 139 128 108 94 64 49 33 23 13 4 247 236 217 190 165 154 141 132 109 97 65 51 34 26 14 6 248 238 218 193 173 155 142 133 110 102 70 52 35 27 17 7	孤屋本と一致するもの
106 例 (42.4%)	246 232 225 214 207 202 197 187 178 164 147 137 122 111 95 86 76 61 50 42 29 5 233 227 216 208 203 198 189 179 169 151 138 124 112 98 89 77 66 53 44 36 9 242 229 219 209 204 199 194 180 170 153 143 125 116 101 90 78 67 54 46 37 18 243 230 221 210 205 200 195 183 174 157 145 126 117 106 91 79 72 58 47 40 24 245 231 223 212 206 201 196 184 177 161 146 130 119 107 92 85 73 59 48 41 25	どちらとも一致しないもの
78 例 (31.2%)	243 227 214 187 173 151 133 116 95 85 67 59 47 37 24 4 245 229 216 189 174 153 135 117 98 86 73 61 49 41 27 5 246 231 220 194 176 161 137 124 101 89 76 64 50 42 29 9 232 223 209 179 164 138 125 106 91 77 65 53 43 33 12 233 226 210 184 170 149 126 107 92 78 66 54 44 36 18	天理本と一致するもの
138 例 (55.2%)	243 234 229 219 205 196 189 180 171 163 152 145 130 122 115 106 98 90 83 77 68 61 53 44 37 25 15 2 245 235 230 222 206 197 191 182 172 164 153 146 131 124 116 107 99 92 84 78 69 62 54 46 38 29 16 5 246 237 231 223 207 198 192 184 174 166 156 147 136 125 117 111 100 93 85 79 73 63 57 47 39 30 18 8 241 232 227 214 201 194 187 175 168 159 150 137 126 118 112 101 95 86 80 74 66 58 48 41 31 20 9 242 233 228 216 204 195 188 179 170 161 151 143 129 121 114 105 96 89 81 76 67 59 50 42 36 24 11	孤屋本と一致するもの
93 例 (37.2%)	248 238 218 211 199 183 167 157 142 132 119 104 88 71 52 34 22 13 1 249 239 221 212 200 185 169 158 144 134 120 108 94 72 55 35 23 14 3 250 240 224 213 202 186 177 160 148 139 123 109 97 75 56 40 26 17 6 244 225 215 203 190 178 162 154 140 127 110 102 82 60 45 28 19 7 247 236 217 208 193 181 165 155 141 128 113 103 87 70 51 32 21 10	どちらとも一致しないもの

※異同箇所を示す数字は、付表―(は)の通し番号をそのまま踏襲した。

68	66	61	56	55	47	(46)	(45)	42	41	38	37	36	34	33	32	30	27	26	19	16	15	12	7	4	No.
故郷	かな	女	あらふ	いも	一の	ものは	もとのりなき	不帯	はかり	たちまち	ねきは	はつか	眼前	つたなきを	是	にくむ	か	にくまれ	はかり	かなしけ	はかり	我に	みな	かな	天理本
古郷	哉	をんな	洗ふ	芋	一ノ			おひす	計	忽	根際	廿日	馬上吟	つたなき	これ	悪	歟	恵まれ	計	衰氣	計	朋友	皆	哉	紀野行ぎ画ら巻し
故郷	かな	女	あらふ	いも	一の	ものは	髪なき	不帯	はかり	たちまち	根きは	二十日	眼前	つたなきを	是	悪む	か	にくまれ	はかり	衰け	はかり	朋友に	みな	かな	孤屋本
故郷	かな	おんな	あらふ	いも	一の	ものは	髪なき	不帯	はかり	たちまち	根きは	二十日	眼前	つたなきを	是	悪ム	か	にくまれ	はかり	衰け	はかり	朋友に	みな	かな	泊船本

141	138	136	135	133	130	129	127	125	121	118	117	113	107	106	101	100	94	91	88	(85)	(84)	(83)	82	(79)	70	69
	死に	出し	むさし野を	義朝	いたる	大和	しのふ	みさゝき	のほり	かならず	是	むかし	て	程	わすれ	此	非情	かくすとも	詣て	家有	おくに	やふより	日比	此処	しは	むかし
うち	しに	出る	武蔵野を	よし朝	至る	やまと	忍	御廟	昇り	必	これ	昔	ほと	計	忘	この	非常	かくす共	詣てゝ				日ころ		雖	昔
中	死	出し	武蔵野	よしとも	いたる	大和	しのふ	御陵	のほり	かならず	是	むかし	程	はかり	わすれ	此	非情	かくすとも	詣て	家有	奥に	藪より	日比	此処	皺	むかし
中	死に	出し	武蔵野	よしとも	いたる	大和	しのふ	御陵	登り	かならず	是	むかし	程	はかり	わすれ	此	非情	かくすとも	詣て	家有	おくに	藪より	日比	此処	皺	むかし

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

(199)	(198)	(197)	(196)	(195)	(194)	193	189	186	184	183	(181)	(180)	177	175	174	173	171	167	166	164	162	160	158	154	152	145	144	143	
						おほろ	越	我	ぬすまれ	きのふ			朝かすみ	牛	むこ	たか	くれ	かな	あした	うらふ	声	しくるゝ	こからし	とまり	なかゝに				
						朧	こえ	我か	盗れ	昨日ふ			薄霞	うし	聾	誰か	暮	哉	朝	うらふ	こゑ	時雨ゝ	木枯	とまり	中ゝに	こと	しろき	明ほの	
							越	我	ぬすまれ	きのふ	所のよし	秋風居住の	朝霞	牛	婿	誰	くれ	かな	あした	うらふ	声	しくるゝ	木からし	とまり	なかゝに	事	白き	あけほの	
							越	我	ぬすまれ	昨日			朝霞	牛	婿	誰	くれ	かな	旦	うらう	声	しくるゝ	困	とまり	なかゝに	事	白き	あけほの	
							おほろ	越	我	ぬすまれ	昨日			朝霞	牛	婿	誰	かな	うらう	声	しくるゝ	旅店に	休らひとて	屋の	おほろ	越	我	ぬすまれ	昨日
								腰を	かけて	躑躅いけて																			
								腰を	懸て	つゝしいけて																			

※ () 内は、比較の際、一方の本文に欠落があるため、結果として他方の独自性が目立つ例である。消極的な独自性なので () を付した。以下、表 (B)・(C) についても同じ。

234	232	231	230	225	224	223	222	221	220	217	216	214	213	210	209	208	207	206	(205)	(204)	(203)	(202)	(201)	(200)
かな	ゆく	山家	かひの国	とこく	かな	卯の花	恋	云遣し	方	たまふ	むつき	我	くらはん	我	かな	いき	あふ	廿						
哉	行	山中	甲斐の	杜国	哉	卯花	こひ	申遣し	許	給ふ	睦月	予	喰はん	我か	哉	生	逢ふ	二十						
かな	ゆく	山家	甲斐の国	杜国子	かな	卯の花	恋	申つかはし	方	たまふ	むつき	我	くらはん	我	かな	いき	逢	貳拾	雀かな	花見只なる	菜畠に	吟行	干鱈サク女	其かけに
かな	ゆく	山家	甲斐の国	杜国子	かな	卯の花	恋	申つかはし	方	たまふ	む月	われ	くらはん	我	かな	活	あふ	廿	雀哉	花見只なる	菜畠に	吟行	干鱈さく女	其陰に

付表Ⅰ(B) 孤屋本『野ざらし紀行』独自の表現・表記

No.	天理本	野ざらし紀行画巻	孤屋本	泊船本
2	けむ	けむ	けん	けむ
3	八月	八月	は月	八月
6	降て	降て	ふりて	降て
10	此たひ	此たひ(度)	此旅	此たひ
14	ちり	ちり		チリ
17	川	川	河	川
18	たえす	たえす	たへす	たえす
22	けむ	けむ	けん	けむ
23	こよひ	こよひ	今宵	こよひ
24	あす	あす	明日	あす
25	ちゝ	ちゝ	父	ちゝ
30	にくむ	悪	悪む	悪ム
31	あらし	あらし	あらす	あらし
35	みちのへ	道のへ	道野部	道のへ
40	有けるを	有けるを	有けるに	有けるを
43	かけ	かけ	掛	懸
49	ほのくらく	ほのくらく	ほのくらし	ほのくらく
50	見えて	見えて	見へて	見えて
52	千とせ	千とせ	千年	千とせ
54	をんな	をんな	おんな	をんな
59	ある	ある(或)	有	ある
62	あか名	あか名	我名	あが名
64	たき物	たき物	焼物	たきもの
65	とふ	とひて	問て	とひて
67	初	初	はしめ	初

75	73	71
汝か	拝めよ	たゝ
80	彼	彼
84	おくに	おくに
87	おく	おく
89	へたる	へたる
95	ひかれて	ひかれて
96	おく	おく
97	木を	木を
98	ひゝき	ひゝき
102	おほくは	おほくは
103	あそふ	かくる
104		いはむ
105		また
108	有	有
109	有て	有て
110	たる	たる
111	たふとし	たふとし
112	彼	彼
114	みえて	みえて
120	耳を	耳を
122	日	日
123	既	既
128	しのふくさ	しのふ草
131	います	います
137	おもひて	おもひて
71	只	只
汝か	おかめよ	おかめと
80	例	例
84	奥に	奥に
87	奥	奥
89	経たる	経たる
95	引れて	引れて
96	奥	奥
97	木	木
98	響	響
102	多くは	多くは
103	かくれ	かくる
104	いはん	いはむ
105		また
108	有	有
109	有て	有て
110	たる	たる
111	たふとし	たふとし
112	彼の	彼の
114	見へて	見へて
120	耳も	耳を
122	日	日
123	既ニ	既ニ
128	忍ふ草	しのふ草
131	今須	います
137	おもひ	おもひて
71	唯	只
汝か	おかめと	おかめよ
80	なんちに	なんちか

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

206 (205) (201) (200) (199) (198) 192 188 185 (181) (180) 178 176 173 170 164 158 157 151 150 148 147 146 142 140	139 138
廿 辛崎 伏見 ふしみ 水とり 出る たか 暮 うらふ こからし 風吟ス たるそ たる 名のる 大イニ あつたに にて	秋 死に
二十 辛崎 伏見 ふしみ 水とり 出る 誰か 暮 うらふ 木枯 風吟ス たるそ たる 名のる 大イニ 熟田に かた にて	秋 しに
貳拾 雀かな 干鱈サク女 其かけに 躑躅いけて かけて からさき 伏見 伏見の 所のよし 秋風居住の 水取 いつる 誰 くれ うろふ 木からし 風吟す たり たり 名乗 大イに 熟田ニ 方 にて	秋 死
廿 雀哉 干鱈さく女 其陰に つゝしいけて 懸て 辛崎 ふしみ 伏見 水取り 出る 誰か 暮 うらう 風 風吟ス たるそ たる 名のる 大イニ 熟田に かた にて	あき 死に

228 218 212 211 207
ふたゝひ まこと 共に おはりのくに あふ
二たひ まこと ともに 尾張の国 逢ふ
二度 誠 友に 尾張国 逢
二たひ まこと ともに 尾張の国 あふ

70	60	56	55	52	51	45	40	35	34	32	28	26	23	22	21	19	17	14	13	10	7	6	3	1	No.
て	入	有	か	ま	茶	け	に	風	秋	聴	う	有	ほ	ち	預	有	尽	ち	ち	た	さ	却	寒	無	天
ふ	事		け	つ		り	く				き		と	り			し	り	り	り	す	て	気	何	理
				は			む																		本
て	入	有	か	松	茶	け	悪	風	秋	聞	う	有	ほ	ち	預	有	尽	ち	ち	た	指	却	寒	無	野
ふ	事		け	葉		り	む				き		と	り			し	り	り	り		て	気	何	ざ
				屋							世														ら
																									し
																									紀
																									行
																									画
																									巻
て	入	有	掛	松	茶	け	悪	風	秋	聞	う	有	ほ		預	有	尽	ち	ち	た	指	却	寒	無	孤
ふ	事			葉		り	む				き		と				し	り	り	り		て	気	何	屋
				屋							世														本
																									本
て	入	あ	懸	松	ち	梟	悪	か	あ	き	浮	あ	辺	チ	預	あ	つ	チ	け	指	却	さ	無	泊	
う	り			葉	や		ム	ぜ	き	世	く	り	り	リ	ケ	る	く	リ	り	ス	而	む	何	船	
																	し	ト				気		本	

付表一(C) 泊船本「野ざらし紀行」独自の表現・表記

142	141	140	139	133	132	128	127	123	120	119	113	110	109	108	104	103	102	97	94	88	87	82	75	72	71
	暮	秋	た	又	所	有	いた	年	既	の	み	跡	庵	我	伐	ふ	まつ	大	当	彼	彼	ま	た	女	云
		寝	ひ				る			ほ	え				かく			イ	麻			ゆ	き	物	
			寝							り								サ	寺						
枕	暮	秋	旅	又	所	有	至	年	既	昇	み	跡	庵	我	伐	ふ	松	大	当	彼	彼	ま	た	を	云
		寝	寝				る			り	え				かく			イ	麻			ゆ	き	ん	な
																		サ	寺				物		
枕	暮	秋	旅	又	所	有	いた	年	既	の	見	跡	庵	我	伐	ふ	松	大	当	例	例	ま	焼	女	云
		寝	寝				る			ほ	へ				かく			イ	麻	の		ゆ	物		
										り								サ	寺						
まくら	く	あ	旅	又	所	有	いた	年	既	登	見	跡	庵	我	伐	深	姿	大	当	れ	れ	眉	た	お	い
	れ	き	ね	た	処	あ	る			り	え	あと	い	わ	く	を	い	い	麻	の		き	ん	ひ	
										二				れ	ル	を	を	寺				き	ん		

『野ざらし紀行』における芭蕉の挫折 (二)

215	213	212	211	(208)	(203)	(202)	(200)	(199)	193	190	186	185	183	181	178	177	169	167	165	162	160	158	157	155	154	148	144	
小嶋	桜	いき	ふたつの						松	やまち	逢	姿	きのふ	水とり	むこ	たか	あした	うらふ	雪み	しくるゝか	くさ枕	竹斎に	こからし	入	やとり	あつた		
小嶋	桜	生	二ツの						松	山路	逢	姿	昨日ふ	水とり	聒	誰か	朝	うらふ	雪見	時雨ゝか	草枕	竹斎に	木枯	入	やとり	熟田	浜のかたに	
小嶋	桜	いき	二ツの	雀かな	干鱈サク	其かけに	躰蜀	かけて	松	山路	逢	姿	きのふ	水取	婿	誰	あした	うらふ	雪見	しくるゝか	草枕	竹斎に	木からし	入	やとり	熟田	浜の方に	
小嶋	さくら	活	二ツ	雀哉	干鱈さく	其陰に	つゝし	懸て	姿	やま路	あふ	すかた	昨日	水取り	婿	誰力	旦	うらう	ゆき見	しくるゝ敷	草まくら	竹斎ニ	閑	入ル	屋とり	熟田	浜のかたへ	

250	249	248	247	244	240	239	238	236	225	224	221	218	217
夏衣	程に	帰り	庵	立よる	わけ出る	下ン	吾妻	形見	むつき		我	きたり	したひ
夏衣	ほとに	帰り	庵	立より	分出る	下らん	東	形見	睦月	今年	予	来り	聞
夏衣	ほとに	帰り	庵	立より	分出る	下らん	東	形見	むつき	今年	我	来り	聞
なつ衣	かへり	いほり	たちより	分け出る	くたらん	あづま	かたみ	む月	ことし	われ	来たり	きゝ	